

## ある四つの戦争詩から

川村学園女子大学名誉教授

熊谷園子

日本社会が戦争のことを忘れても、世界には絶え間なく紛争や戦争が続いている。それぞれの争いには当事国にしか分からない古からの根深い因縁や力関係があり、極東の島国にはそこで起こっていることに簡単に口を挟むのは難しいかも知れない。

目下、私たちが目を離せないのは、ロシアによるウクライナ侵攻とパレスチナにおけるイスラエルとハマスの衝突であろう。日々メディアが伝える被害の大きさや生々しさに心を痛めないものはいない。そして世界の人々がリアルタイムで観ている中で、市街地への破壊、とりわけ武器を持たない一般市民、子供・女性が犠牲になっているのにそれを止めることが出来ないのは情けないことある。無力感を感じざるを得ない。

英詩を専門にしていると沢山の優れた戦争詩に出会う。第一次、第二次世界大戦は遠い昔のこのように思われるかもしれないが、すべて今日の紛争と繋がっているし、何より戦争の方法がほとんど変わっていないことに驚かされる。いかに技術が発達しようとも戦場に赴くのは人間であり、その肉体は傷つきやすいままであると同時に、その状況のなかで悩み苦しむことのできる存在である。そのことの意味と価値を過去の戦争詩の中でもう一度問い直してみたいと思う。

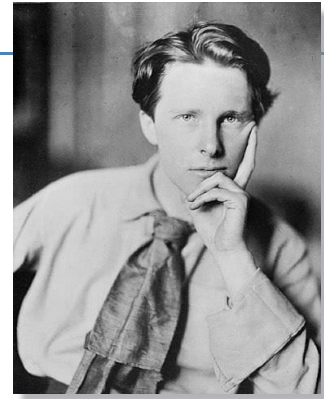
今回は第一次世界大戦を巡って四人の詩人の比較的分かりやすい四つの戦争詩を抽出して、それぞれの事情、兵士の想い、戦場のリアルな惨状をどのように詩にまとめているかを検証して、戦いの業火の下にはこのような生身の人間がいることをまず再確認することから始めたいと思う。

また、イギリスには「良心的徴兵拒否」という制度があったこと、それがどのように機能したかあるいはしなかったかを取り上げて行きたい。というのは反戦の想いを詩にしながら自ら志願して戦場に赴き、戦死した詩人もいるからである。

## 四つの戦争詩

### ◇ *If I Should Die*

By Rupert Brooke (1887–1915)



### ◇ *In Flanders Fields*

By John McCrae (1872–1918)



### ◇ *An Irish Airman forsees his Death*

By William Butler Yeats (1865–1935)

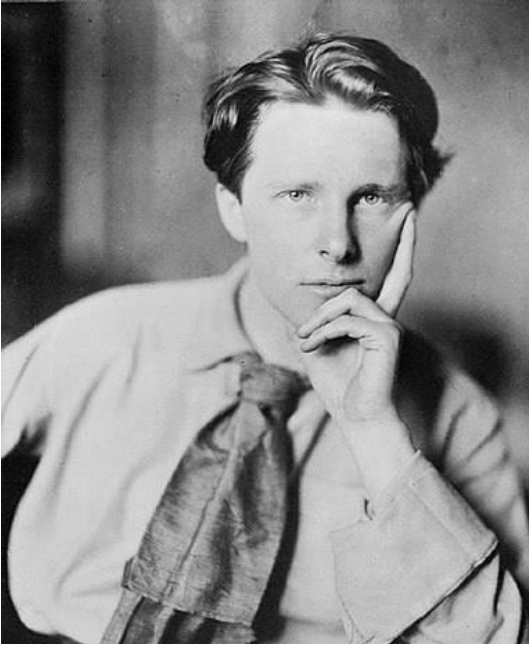


### ◇ *Dulce Et Decorum Est*

By Wilfred Owen (1893–1918)



## ◆ *If I Should Die*



Rupert Brooke (1887-1915)

★ブルックを始め、オックスブリッジの将来国を背負うような優秀な青年の志願は、庶民的若者の志願の五倍以上に達した

- ケンブリッジのアポロと云われた美しい容姿の詩人で1911年に24歳ですでに『詩集』を出していて戦争が始まる前にすでに知られた存在であった。
- 1914年9月には、のちに首相となるチャーチルの紹介で、海軍に入隊し、12月のクリスマス休暇の時、初めて戦死するかも知れないという現実に向き合い、休みを返上して詩を書き続け、詩集『1914年』を完成
- このソネット（14行詩）はその中に収められている
- 翌年2月下旬に、ダーダネルス作戦のため、船でガリポリに向かい、4月17日、スキロス島に上陸し、20日までは元気だったが、野外演習の後、体調を崩したので、フランスの病院船で治療を受けたが、23日4時20分、息を引き取った。敗血症と診断された。
- 遺体は、ギリシャ領スキロス島のオリーブ果樹園の中に埋葬された。（戦場の片隅ではないが）
- 彼の死はすぐに *TIMES* 誌に取り上げられ、イギリス中が悲しむとともに、戦争に向かって国が一つになっていく大きな役割を果たす。

### *If I should die*

*Rupert Brooke (1887-1915)*

- ▶ If I should die, think only this of me:
- ▶ That there's some corner of a foreign field
- ▶ That is forever England. There shall be
- ▶ In that rich earth a richer dust concealed;
- ▶ A dust whom England bore, shaped, made aware,
- ▶ Gave, once, her flowers to love, her ways to roam;
- ▶ A body of England's, breathing English air,
- ▶ Washed by the rivers, blest by suns of home.
- ▶ And think, this heart, all evil shed away,
- ▶ A pulse in the eternal mind, no less
- ▶ Gives somewhere back the thoughts by England given;
- ▶ Her sights and sounds; dreams happy as her day;
- ▶ And laughter, learnt of friends; and gentleness,
- ▶ In hearts at peace, under an English heaven.

## If I Should Die

もし僕が死んだら 僕についてこのことだけ覚えてほしい  
どこか異国の戦場の一角が  
永遠にイギリスとなることを  
その肥沃な大地にさらに豊かな土が隠されたということ  
イギリスが生き 形づくり 覚醒させ  
かつて イギリスの花を愛し その道をさまよった  
イギリスという大地の一部だから イギリスの空気を吸い  
その川で洗われて 母国の太陽で祝福されたのだから  
どうかこのように考えてほしい すべての悪が洗い流されたこの心は  
悠久の大いなる心の一つの鼓動となって  
イギリスが与えてくれた思慮や感性とともにどこかに戻っていくのだと  
あの風景や音色 あの陽光に彩られた幸せな夢  
笑い転げたこと 友情を知り そして覚えた寛容さ  
平和な心のうちに イギリスの空のもと育まれたすべてのものとともに



トルコ&エーゲ海



ダーダネルス海峡



ガリポリ半島



スキロス島

\*ガリポリ上陸作戦は、海運相チャーチルの主唱の下、1915年4月から翌1月にかけて実施された作戦。

ダーダネルス海峡の北岸に当たるガリポリ半島に上陸し、背後からコンスタンティンノーブル（トルコの首都）攻略することを想定していたが、大失敗に終わり、チャーチルは責任をとってポストを辞任する。チャーチルは、第二次世界戦争では、ノルマンディー上陸作戦を決行し、ヒトラーから世界を救った男となる。

## ◆ In Flanders Fields



John McCrae (1872–1918)

- John McCrae は、イギリスの同盟国カナダ出身の医師
- ベルギー西部の激戦地、Flanders の Ypres (イープル) に従軍医師として赴く
- 親友、Alexis Hermer が、戦死して埋葬したとき戦没者の墓の周りに poppy (ケシの花) が咲き乱れていたことに気づき、翌日、救急車の後部座席でこの詩を書いたといわれている。
- 書いてすぐ破いて捨てたが、仲間が慌てて拾って、雑誌『パンチ』に投稿した。
- 最初「作者不明」で1915年12月8日に発表されたが、詩が書かれたのは1915年5月3日とされている。
- その後も従軍を続けていたが、1918年に肺炎で亡くなる。

### ***In Flanders Fields***

*John McCrae(1872- 1918)*

In Flanders fields the poppies blow  
Between the crosses, row on row,  
That mark our place; and in the sky  
The larks, still bravely singing, fly  
Scarce heard amid the guns below.

We are the Dead. Short days ago  
We lived, felt dawn, saw sunset glow,  
Loved and were loved, and now we lie,  
    In Flanders fields.

Take up our quarrel with the foe:  
To you from failing hands we throw  
The torch; be yours to hold it high.  
If ye break faith with us who die  
We shall not sleep, though poppies grow  
    In Flanders fields.

## In Flanders Fields

フランダースの戦場に ポピー花が咲き乱れる  
果てしなく続く十字架の列の合間に  
そこは僕らの埋められている場所だ 空には  
雲雀が なおも勇敢に歌いながら 飛んでいる  
地上の銃撃戦で かき消されてしまうとしても

僕らは死者だ ほんの数日前まで  
僕らは生きていて 暁を感じ 夕日が照り映えるのを観ていた  
愛し愛されてもいた だが 今やここに眠る  
フランダースの戦場に

受け継いでくれ 僕らの敵との争いを  
崩れ落ちていく手から投げ渡すよ この松明を  
どうか君たちのものとしてそれを高く掲げてくれ  
もし君たちが死者である僕らとの誓いを破るなら  
僕らは眠ることが出来ない ポピーの花が咲き誇ろうと  
フランダースの戦場に

## 第一次世界大戦の激戦地



塹壕戦：独仏両軍が砲弾から身を守って敵に近づくため、塹壕を構築し760キロに達した



\* 第一次世界大戦の激戦地ソンムでは、一日の攻撃で連合軍57,000人の死傷者が出たとわれている



## イギリスの戦没者追悼式典



毎年11月にポピーを飾って追悼するので、  
その時期にイギリスに行ってポピーの  
花をつけている人に会ったら、  
この詩を思い出して下さい  
－ Remembrance Poppy －





## ◆ *An Irish Airman foresees his death*



William Butler Yeats (1865-1939)

- Yeatsの生没年をご覧になると分かるように、彼は戦争では亡くなっていない。Yeatsは、1923年にノーベル文学賞を授与されている大詩人で、アイルランドの文芸復興に寄与した。
- アイルランドは当時イギリスの植民地として大変貧しい国で、特に宗派の違いから南アイルランドはイギリスに踏みにじられていた。
- この詩の具体的なモデルは、友人の息子ロバート・グレゴリーではないかと言われている。ロバートはイギリス航空部隊に入隊し、1918年初めに戦死を遂げた。
- しかし、この詩は個人へ捧げたというより貧しさから入隊して、大義無き戦争に身を投じた多くのアイルランドの若者を代弁して書いたとみられる。
- アイルランドの閉そく感を背景とした若者の刹那的心理
- 南アイルランドは、長い闘いの後、1922年にイギリスから独立

### *An Irish Airman foresees his Death*

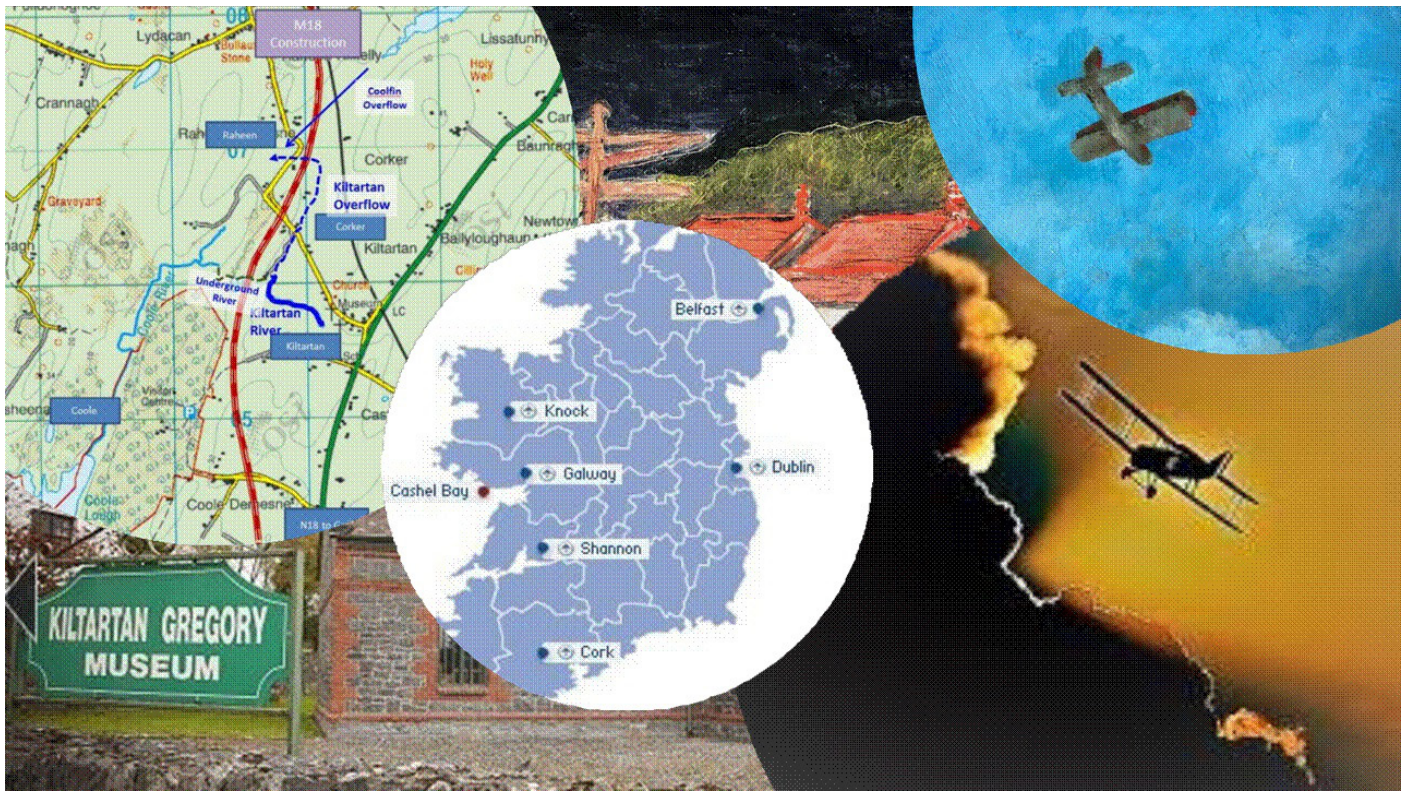
*William Butler Yeats (1865-1935)*

I know that I shall meet my fate  
Somewhere among the clouds above;  
Those that I fight I do not hate,  
Those that I guard I do not love;  
My country is Kiltartan Cross,  
My countrymen Kiltartan's poor,  
No likely end could bring them loss  
Or leave them happier than before.  
Nor law, nor duty bade me fight,  
Nor public men, nor cheering crowds,  
A lonely impulse of delight  
Drove to this tumult in the clouds;  
I balanced all, brought all to mind,  
The years to come seemed waste of breath,  
A waste of breath the years behind  
In balance with this life, this death.

## ***An Irish Airman Foresees his death***

僕には分かっている 頭上に広がる雲のどこかで  
僕の死と出会うことを  
僕が戦う相手を憎んでもいないし  
僕が守る人たちを愛してもいない  
僕の祖国はキルタータンクロスで  
国の人々はキルタータンの貧乏人  
どんな結末に終わろうとも何ら損も与えなければ  
今より暮らしぶりが良くなるわけでもない  
如何なる法律も義務も僕に戦えと命じているわけでもないし  
役人も来ないし 旗を振って見送る群衆もない  
ただ見知らぬ歓喜が強い衝動となって  
雲の中の騒乱に僕を駆り立てるのだ  
すべてを思いめぐらし すべてを斟酌してみても  
これからの年月は息の無駄に思える  
これまでの年月だって息の無駄だった  
この命 この死の実感と比べれば





## 麦の穂をゆらす風



アイルランドとイギリスの関係がよくわかる映画  
 第59回カンヌ国際映画祭で最高賞にあたる  
パルム・ドールを受賞



Wilfred Owen (1893–1918)

生れ：

ウェールズ近くのシュロップシャー

- 家はいつも家計が苦しいため、地元の工業高校へ行ったが、大学への夢が捨てきれず、ダンスデンの教会の無給助手をしながら勉強し、ロンドン大学に受かったが、奨学金を取れるところまではいかなかったため、諦めてフランスに渡り、ベルリッツの英語教師に就く
- 翌年1914年に、ドイツがフランスに宣戦布告して来たのでイギリスに帰って自ら志願して兵役に就く。(1915年10月入隊)
- 戦場に行くのは、1917年2月からで、第一次大戦の激戦地 Somme で、第2マンチェスター部隊の配属。ドイツ軍を追撃中、すぐそばで爆弾が炸裂したため、シェルショック(砲弾神経症)になり、帰国してスコットランド・エディンバラの Craiglockhart 病院に入院する
- 治療に一環として作詩が奨励され、作詩過程で戦場での回想作用が効果を発揮するとされた。
- その病院に詩人ジークフリート・サスンが入院してきて、その影響で、反英雄的な詩を書くようになる。
- 1917年暮れに退院して、1918年8月には第2マンチェスター部隊に加わり10月には戦闘の成功で軍事勲章を授与される。
- 1918年11月4日、最後の前線に出兵、戦死した。停戦の1週間前だった。

### *Dulce et Decorum Est*

*Wilfred Owen (1893-1918)*

- ▶ Bent double, like old beggars under sacks,
- ▶ Knock-kneed, coughing like hags, we cursed through sludge,
- ▶ Till on the haunting flares we turned our backs,
- ▶ And towards our distant rest began to trudge.
- ▶ Men marched asleep. Many had lost their boots,
- ▶ But limped on, blood-shod. All went lame; all blind;
- ▶ Drunk with fatigue; deaf even to the hoots
- ▶ Of gas-shells dropping softly behind.
- ▶ Gas! GAS! Quick, boys!—An ecstasy of fumbling
- ▶ Fitting the clumsy helmets just in time,
- ▶ But someone still was yelling out and stumbling
- ▶ And flound'ring like a man in fire or lime.—
- ▶ Dim through the misty panes and thick green light,
- ▶ As under a green sea, I saw him drowning.
- ▶ In all my dreams before my helpless sight,
- ▶ He plunges at me, guttering, choking, drowning.
- ▶ If in some smothering dreams, you too could pace
- ▶ Behind the wagon that we flung him in,
- ▶ And watch the white eyes writhing in his face,
- ▶ His hanging face, like a devil's sick of sin;
- ▶ If you could hear, at every jolt, the blood
- ▶ Come gargling from the froth-corrupted lungs,
- ▶ Obscene as cancer, bitter as the cud
- ▶ Of vile, incurable sores on innocent tongues,—
- ▶ My friend, you would not tell with such high zest
- ▶ To children ardent for some desperate glory,
- ▶ The old Lie: Dulce et decorum est
- ▶ Pro patria mori.

## *Dulce et Decorum Est*

腰は二つに折れ曲がり ずだ袋を担いだ老いた乞食ように  
がくがくした膝で 老婆のようにせき込んでは 泥道で悪態をつく  
ひゅうひゅうと降ってくる砲弾に背中を向けて  
遠い野営地に向かって やがて僕らはぼとぼと歩き始めた  
兵士は眠りながら歩き ブーツを失した多くのものは  
血が滲んだ足でびよこびよこと進み 誰もが傷を負い 目も見えてなかった  
疲労困憊に酔っ払い 砲弾の音も聞こえず  
ガス弾がいつの間にか背後に落ちるのも気付かなかった

ガスだ ガスだ！ 逃げ みんな― 呆然とした混乱の中  
ひん曲がったままヘルメットを何とかかぶった  
だがまだ叫んでいる誰かは つまずいてはよろけていた  
炎かとりもちにでも捕まったみたいにもがき苦しみながら―  
濃い緑の光を受けて曇ったガラスを通すようにぼんやりと  
緑の海の中に 彼が溺れていくのを僕は見た

救いがたい光景の いつもの夢の中で  
吐きながら 喉を詰まらせながら 溺れながら 彼が飛び掛かってくる

息の詰まるような夢の中で 彼を投げ入れたワゴンの後を  
もしあなたも共に歩き  
その白目が断末魔でよじれ回る顔を見るならば  
罪で苦しむ悪魔のように だらりと垂れたその顔を  
揺れるたびに 腐った肺からごぼごぼと血が溢れ出るのを  
もしあなたも聴くならば  
無実の舌に 癌のように爛れた 吐き戻しのように苦い  
悪性の 治ることのない傷と血が泡立ってくる音を

友よ あなたはもはやかくも熱心に語ることはないだろう  
ひたすら栄誉を求めたがる子供たちに あの古の嘘を  
「美しくも栄誉あること  
それは祖国のために死ぬことなり」と

◆ Wilfred Owen が生まれ育った場所



United Kingdom



London



Shropshire



Dunsden



Edinburgh



Wilfred Owen



Craiglockhart



Siegfried Sassoon (1886-1967)

◆オーウェンは反戦的・アンチヒロイズムを持っていたのになぜ戦争が始まってすぐ（1915年）に志願したのか疑問に思い、時代的背景と反戦運動に動いた人たちについて調べてみた

☆1916年 初旬 「兵役法」が施行され「徴兵制」が布かれた。



良心的兵役拒否(Conscientious Objectors) ⇒ COs を含む

### 戦闘業務の遂行を拒む良心

第一、戦闘業務に就くことを拒むもの

第二、入隊はしないが、「国にとって重要」な非軍事的代替業務を行うのはよしとするもの

第三、あらゆる業務の遂行を拒むもの → **絶対拒否者**

申請したもの16,200人（入隊者の0.33%）

8割以上が何らかの免除が認められたが、全面免除は極めてまれだった

認められたのは、主にクエーカー教徒などのキリスト教による「宗教的拒否者」で、

それ以外は非難の意味を込めて「政治的拒否者」と呼ばれ、弾圧の対象となった

### 絶対拒否者

入隊の裁定を下されたもののそれを拒否したCOsの扱い

1. 彼らにはある時点で招集令状が来る
2. 招集に応じなければ、脱走兵としてまず警察に逮捕される
3. 罰金が課された上で、身柄を軍に引き渡され、兵士として軍法の支配に置かれる
4. 軍服を着ない、書類にサインしない等命令不服従を繰り返せば、営倉に入れられ、軍法会議にかけられる

◇こうした抵抗の道を選択するCOsは、約600人に上った

獄中生活の中で特に嫌忌されたのが「沈黙の規制」であった。受刑者同士の会話は

全く許されず、看守との間で許可されるものも必要最低限の実務的会話だけで、

絶対拒否者に与えられたストレスは計り知れないものであった



## ◆ 獄中の活動

- ▶ 筆記道具を与えられない条件の中、  
隠匿した鉛筆や鳥の羽根、トイレット  
ペーパーを一使って
- ▶ COs たちが雑誌を作成し、流通した
- ▶ 少なくとも 8 カ所の刑務所で雑誌が  
出回ったといわれ
- ▶ 中には 100 号以上続いた例もある



## ◆ 反徴兵制のリーダー、Clifford Allen の場合

1916 年 8 月～1917 年 12 月までほぼ連続的に 3 度にわたる刑務を務めている

出獄時には体重は 50 キロまで激減しており、結核菌に蝕まれていた  
(健康不良を理由に釈放される)

★支援者の一人：Bertrand Russell  
ケンブリッジ大学の哲学者・数学者



Clifford Allen



## ◆ COs たちの戦後

- COs たちの苦しみは戦争が終わった時から始まる

### Allen の日記より：

他の国民と一緒にありたいと、彼らの歓喜とその理由を共有したいとこの時ほど強く切望したことはなかった…戦争が終わりそうだということは、私にも嬉しかったが、しかし、誰もが心を高揚させている達成感に、私はまったく役割を果たしていなかったのだ…

### Russell の述懐：

戦争が終わった時、自分たちがやってきたことが自分自身にとって以外はまったく無益だったことが分かった私は、たった一つの生命を救いはしなれば、たった1分も早く戦争を終わらせもしなかった…ヴェルサイユ条約の原因となった敵意を弱めることにもならなかった…

### 世論の趨勢：

自らの命を捨てずに済んだ良心的兵役拒否者たちは、ヒロイックな態度を慎まなければなりません…死者たちに対して礼儀に適った感謝の意を表すべきだ…

### 世間の目：

「コンチー」(conchie) = 無責任な臆病者という蔑称を用いて彼らに激しい敵意をむけた…

## ◆ その後の推移と再評価

- そもそも第一次世界大戦は、「最後の戦争」つまり戦争を終わらせるための戦争  
“The War to end wars” のはずであり、その名称も Great War (大戦争) と呼ぶのが当時一般的
- 戦時中では、「戦争を終わらせるための戦争」のスローガンが多くの人々を惹きつけた
- 戦後しばらく経つと、大戦を経験したイギリスでは戦争を忌避する言説が広く受け入れられ、大戦期の COs についても好意的な見方が浸透した
- 二度と戦争に巻き込まれたくないという思いから、「コンチー」への否定的評価は覆され、反戦・平和の灯を守った人々として、賞揚の対象にさえなった
- COs メンバーが議員の地位を獲得した例は二桁に達し、アレンやラッセルも爵位を得ている

**Allen：** 国際連盟で活躍し、国際連盟が機能不全に陥るとミュンヘン会議（1939年9月）を整える  
(アレンは、獄中で発症した結核のため、第二次世界大戦直前に死亡している)

**Russell：** ナチス・ドイツを打倒するためには軍事力を用いることもやむなしの結論に達する

以上の四人の詩人によるこの四篇の詩について少し解説してみよう。

最初の Rupert Brooke による *If I Should Die* は、死して一塊の土くれになってもなお祖国に愛を捧げる愛国心という普遍的なテーマを扱っているが、祖国でエリート階級として特に大切に扱われ育てられてきた青年が死の現実を前にしたとき、自分の身体も精神もイギリスが育んだ優れたものだから “Mind”（「大いなる心」と訳した）の一部に戻るだけだと納得しようとする。一塊の土は神がアダムを作った旧約に由来し、“Mind” と一体に戻る前に「すべての悪は洗い流され」とあるので洗礼のイメージでキリスト教が背景であることは明白であるが、土である個人の豊かさ（笑い転げたり 友情を知り 寛容さを育む etc.）の充満する心身の存在はいかにもイギリス産であり、自然信教の様相を呈して独特である。

二番目の *In Flanders Fields* は、大変ポピュラーな詩となる。戦後この詩に触発されたアメリカのある女性が、退役軍人を助けるため造花の赤いポピーを販売することを思い付き、フランスやイギリスにこの運動が広がった。終戦の日の11月11日に一番近い日曜日に Remembrance Day として各地で追悼式が行われるので、10月下旬から街に募金箱が設置され、寄付をするとポピーがもらえるようになっている。1921年ごろから始まったこの運動は、「死者の弔いと不戦の誓い」とともに長らく定着してきたが、二千年代に入ると違う様相を帯びてくる。それはアフガニスタンやイラクへの派兵の是非など様々な主張が生じ、また膨大や寄付金の配分問題、ポピーの政治利用の揶揄、「ポピーファシズム」という言葉さえ生まれ、ニュースキャスターは放送中ポピーを身に着けないなどの配慮がなされてきている。またノンバイオレンスを謳う女性団体による白いポピー運動も有名である。今ではパープルポピーやブラックポピーなども出現している。

死者が戦いの大義の松明を渡そうとする内容から、この詩は戦争を正当化していると考えられる向きもあるが、空ではひばりが地上の銃撃戦などものともせず歌っていて、埋められた兵士の側でポピーが色鮮やかに咲く自然の描写は、世界を支配できているのはひとり人間だけの思い込みではないかということを優しくも華麗に示しているとも考えられる。

Yeats の *An Irish Airman Foresees His Death* は少し趣が違ふ。当時イギリスの植民地であったアイルランドが舞台である。「戦う相手（ドイツ）を憎んでもいないし、守るもの（イギリス）を愛しているわけでもない」という。ではなぜ志願するのだろうか？それはおそらく貧しさからの選択であろう。二つの世界大戦の後、沢山の国が独立したが、世界の貧困問題は一向に解決していない。貧困とそれによる教育の格差、個人が夢や希望に近づくことの出来ない閉そく感の問題はむしろ今日的テーマである。ウクライナ紛争をみてもロシアが多くの傭兵を送り込んでいるのは事実で、自国産業の弱い近隣諸国の若者が大義なき戦いに飲み込まれている重い現実がある。どんな国や社会で生きる名もなき若者も死を前にしたとき、自分の命の計量に華やかな何かを付け加えたいと思うことには変わりがないのだ。この詩はそのことを私たちににわかに思い起こさせる簡潔だが奥行きのある一篇であろう。

最後に挙げたOwenの *Dulce et Decorum Est* (「美しくも栄光あるかな」) は、その標題は古代ローマの詩人ホラティウスのオードから取られている。この古からの誉れ高い「呼びかけ」をわざわざラテン語のまま使って、その上でOwenはそれを「嘘」であると云ってショッキング効果をもくろむ。その証拠として、詩の中で戦争が罪のない“innocent”な若者を罪そのものである“Devil”のような形相に変えしまう絵図を詳細に繰り広げて、実情はまったく「美しくも尊厳も」ないものだから、「嘘」であると断じる。このレトリックは秀逸ではあるが、ホラティウスが美しいと言っているのは祖国のために命を捧げる行為であって、屍が美しいなどと言っているわけではない。Owenとしてもこの詩で祖国に殉ずることの是非を語っているわけではない。戦火の足元に繰り広げられる生身の人間たちのリアリティを何とかして為政者や国民に知らしめる方法としての技巧であったであろう。

終戦の直前に戦死したOwenはまだ詩集を刊行してなかったが、Sassoonを中心とした詩人たちの奔走によって世に出すことができた。その作品のほとんどが反戦的・アンチヒロイズムに彩られているので、戦争詩人・反戦詩人として読まれることになる。反戦の立場であるのになぜOwenは志願したのかということである。入隊当時は徴兵制ではなかったし、シェルショックの治療後退院して一年足らずで前線に復帰している。そこでイギリスにおける「良心的徴兵拒否」がどの位一般に可能だったのか調べてみたことは上記で示した通りである。宗教戒律を理由とした「戦闘業務を拒む」ことを除けばほとんどが何らかの関連業務(例えば戦争に採られた局員の代わりに郵便局で働く等)に携わり、先に触れた絶対拒否者「政治的拒否者」は投獄されてしまうのである。つまり実際には志願しなくてもやがて徴兵によって入隊することは避けられない状況であった。しかしそれだけでなく、Owenの戦争詩の角度は、理念として反戦活動に身を投じたAllenたちの路線とはまた別で、むしろ積極的に現場を描くという独自のアプローチであった。

恐らくOwenもまた何かを求めて戦争に行った。詩人を夢見て戦場の光景をも描き始めたが、対象としているものがあまりにも憐れで哀しすぎて詩に昇華することは出来ないと悟った。そのことはOwen自身詩集の序文に記している。Sassoonの知識に触れることによって反戦の視点にはっきり目覚めたが、Owenの戦争詩の説得力はその臨場感にある。戦場における真実は、そこに赴いたものだけしか語る事が出来ない。しかしその地獄から生還できたものは少なく、その多くは口を閉ざしたままである。今ではそれはPTSDという言葉で受け止められるかもしれない。人間をそうした事態に追い込むことそのこと一つとっても戦争の矛盾であり、戦争の非合理性である。近代兵器を使った戦争は、紛争解決手段としては必ずや我々が手放さなければならないものであり、その課題は今一度私たちの前に立ち現れている。